

*Handwritten signature or mark*

*Organo de Hokkajda Esperanto-Ligo*

# LEONTODO

**N-ro 59**

**7-1976**

P R O G R A M O  
DE  
LA 40A KONGRESO DE ESPERANTISTOJ EN HOKKAJDO

LA UNUA TAGO (la 24a de julio, sabato)

- 15:00            giĉeto ekfunkcias.  
15:30-17:30    Amuza Kunsido            \* Komitata Kunsido de HEL  
17:30-18:30    Vespermanĝo  
19:00            Malferma Soleno  
                  1. Malferma deklaro  
                      (Saluto de la Prepara komitato)  
                  2. Kantado de la himno ESPERO  
                  3. Elektado de kongresaj prezidantoj  
                  4. Salutoj; Prezidanto de HEL, gastoj,  
                      reprezentantoj de lokaj grupoj kaj  
                      individuaĵaj membroj  
                  5. Honorigo  
20:00            Paroladoj kaj deklamoj  
                  1. s-ro Watanabe T. (en Esperanto)  
                  2. s-ro Išimaru T. (en la japana)  
                  3. el la prove tradukitaj ĵukaroj  
                      s-roj H. Aizawa, A. Hoŝida  
21:00            libertempo

LA DUA TAGO (la 25a de julio, dimanĉo)

- 9:00            Kongresa Laboro  
                  1. Raportoj de la agado  
                      (HEL, ĉiuj rondoj, HEC)  
                  2. Diskuto kaj decido pri proponoj  
10:20            Parolado s-ro Mituisi K.  
                      (Esperante kaj japane)  
11:50            memoriga fotado  
12:00-13:00    tagmanĝo --- ripozo  
13:00            Amikeca Kunsido  
14:40            Ferma Soleno  
                  saluto de prezidanto de HEL, kantado de  
                  TAGIĜO, ferma deklaro  
15:00            disiĝo

## LA ESPERO

En la mondon venis nova sento,  
Tra la mondo iris forta voko,  
Per flugiloj de facila vento  
Nun de loko flugu ĝi al loko.  
Ne al glavo sangon soifanta  
Ĝi la homan tiras familion:  
Al la mond' eterne militanta  
Ĝi permesas sanktan harmonion.  
Sub la sankta signo de l' espero  
Kolektiĝas pacaj batalantoj.  
Kaj rapide kreskas la afero  
Per laboro de la esperantoj.  
Forte staras muroj de miljaroj  
Inter la popoloj dividitaj;  
Sed dissaltos la obstinaj baroj  
Per la sankta amo disbatitaj.  
Sur neŭtrala lingva fundamento  
Komprenante unu la alian,  
La popoloj faros en konsento  
Unu grandan rondon familian.  
Nia diligenta kolegaro  
En laboro paca ne laciĝos,  
Ĝis la bela sonĝo de l' homaro  
Por eterna ben' efektiviĝos.

## LA TAGIĜO

Agordu la brustojn ho nia fratar',  
per nova, pli vigia jam kanto!  
Ĝi sonu potence de montoj al mar',  
Anoncu al ĉiu dormanto:  
Tagiĝo, tagiĝo radias en rond',  
La ombroj de nokto forkuras el mond'.  
Post longa migrado sur dorna la voj'  
Minacis nin ondoj de l'maro  
Sed venkis ni ilin kaj velas kun ĝoj'  
Al verda haven' de l' homaro.  
Post longa batalo malvolica lument'  
La stela standardo jam flirias en vent'.  
En ĉiu mondparto, en ĉiu ter-zon',  
En koroj de centoj da miloj,  
Jam vibras por nia saluto reson',  
Do kantas de l' tero ni filoj:  
Tagiĝo, tagiĝo radias en rond',  
La ombroj de nokto forkuras el mond'.



andi al ni la programon, kaj poste, la raporton pri la kongreso por "La Movado," Kun antaŭdanko,

via Konisi goku

la prezidanto de K L E G

☆ 大会当日は出張に当たっているので出られません。

(菅原鉄雄・厚真町)

☆ 昨年来病気のため身体が思うようにならず、心ならずも失礼をしております。療養に専念しておりますので、今回は不在参加いたします。

(表外造・室蘭)

☆ エスペランティストの熱心を大会が北海道で40回を迎えをということに対して、心から敬意を表します。僕のような初級にも入っていない様な者まで、親切な御案内をお忘れぬその友情に心から感謝申し上げると共に、エスペロの学習を怠けてゐる我身を恥かしく思つてゐます。

■ 40回頃エスペ大会へ感謝の念を込めて1000円を寄附いたします。何れもできぬ僕も心りしみます。通信費の足しにでもして下さい。

(島山三郎太・網走)

### 大会協議事項 (連盟委員会の提案事項)

#### 1. 会費値上げについて

現行の会費	団体会員	1000円	→	1500円 (新会費)
	個人会員	1200円	→	2000円

#### 2. 次期大会の開催地について

#### 3. 1976年度役員改選

トモ

# KASRAPORTU (1975.5.1~1976.6.30)

## ENSPEZO

前期よりの繰越金	19,284円
会費 (別項参照)	125,900円
書籍売上ホ	3,280円
才39回大会残金	40,000円
雑収(L.別刷,ホ等売上)	16,500円
寄付 (別項参照)	56,145円

計 262,109円

(収入)-(支出) = (次期繰越金残高)

262,109 - 201,292 = 60,813円

残高内訳 { 貯金 5,000円  
現金 55,813円 }

## ELSPEZO

印刷費	114,500円
(Leontodo n-roj 27.58)	66,500円
ホスター	48,000円
通信費・送料	40,321円
(L. n-roj 56.57.58)	15,735円
La Gorgona (n-rofina)	4,870円
切手 (por la aliaj 100 informiloj)	7,200円
	6,319円
封筒	2,700円
祝電	1,080円
電話	24,17円
事務用品	326円
写真代	600円
才5回秋の合宿補助	35,550円
才40回大会準備金	10,000円

計 201,297円

### ☆寄付内訳

20,000円	中里和夫
13,000円	桜居甚吉
4,500円	大友頼一
2,300円	西川皓(鎌)
2,000円	岩本清
	藤江庄次郎(札幌)
	西尾務(豊中)
1,845円	太田義勝(福島)
1,800円	影浦英明(船橋)
	関尾大治(東京)
1,000円	高橋達治
	東京工大外通言社
	蟹山三郎(東北)
600円	小林正明
	北島瞳
400円	中西隆嘉
300円	米山寅吉
合計	56,145円

### ☆北海道エスペラト連盟会費納入状況(1975.4.30~1976.6.30)

1973年分(今期取組)	SES 1名	1,000円
1974年分(" " )	SES 4名	4,000円
1975年分(団体会員 1000円, 個人会員 1200円)		

SES 10名 (+14)	10,000円
OEA 10名	10,000円
TES 6名	6,000円
TERO 5名	5,000円
HES 1 (+4)	—

個人/在外購読会員	19名 (+10)	23,500円
北城・平田・竹吉・岡本		
堀江・小林・影浦・齋		
佐藤・関尾・菅原・西		
米山・大島・北島・斎藤		
松岡・太田・西尾・森口・柴山		

### 1976年分(団体1000円(1500円), 個人1200円(2000円))

#### ( )内は新会費

SES 8名 × 1000円	8,000円
OEA 10名 × 1000円	10,000円
TES 7名 × 1000円	7,000円
TERO —	—
HES —	—

個人/在外購読会員	17名	31,400円
(1200円) 新田・佐藤		
岩本・米山・岡本・菅原		
梅津・池本・北城		
(1600円) 平田		

(2000円) 中西・影浦		
高橋・関尾・菊地・江口(正)・柳原		
A. Woessink - N. 農野・高槻以会		

### 1977年分(団体1500円, 個人2000円)

個人会員 2名	4,000円	中西・桜居
---------	--------	-------

● 合計 125,900円

\* 1974年分 個人会員 5名 6,000円

北海道エスペラント連盟図書部 (Libroservo de HEL) 発足！！

さらに一層の資金協力を！

2月末の連盟委員会で、今年り大会までに会員から1口1万円で購入金を募り、図書部を発足させようと決議してから々々、会員有志の暖かいご協力によつて、一応当初の予定通り30万円の規模で営業開始が実現しました。

第40回大会で店開きということになります。

図書部基金拠出者 (1976年6月30日現在)

10万円 山賀 勇

2.5万円 札幌エス会

2万円 中里和夫、藤村忠明、沢谷雄一、函館エス会

1万円 阿波加和子、平田君雄、花房義次、柴田昌子、江口音吉、ゴト一  
ヨシハル、大友鶴一、北島隆、木村喜任治、江口正元、  
黒川薫美子、菊島和子(東京)、星田淳、相沢治雄

1千円 KN

合計 34万6千円

図書部は連盟の会社とは別で独立採算制になります。現在の規模では、初級講座用のテキスト、辞書、入門学習書以外1〜2冊程度しかストックできません。まだ種類も少なく、まだまだ揃えておかねばならない本が多数あります。運送資金が乏しいので、新刊本の供給がすぐにはできないといつて困難があります。会員の皆さんからの図書部への投資を期待します。1口1万円。(資金拠出者の方で、もしも何かの都合で拠出金の返還が必要となった場合、現金かまたは相当額の書籍でお返しします。)無配当の株式会社へ投資しなと思つて下さい。

北海道エスペラントセンターには常時無人販売スタンドを設けてあります。ご利用下さい。図書部の管理運営は佐藤忠利があたります。図書部の通信販売による注文先、図書部基金への拠出金送り先は

北海道エスペラント連盟図書部

(Libroservo de HEL) 振替(小梅) 8267番

062 札幌市豊平区平岸 I~8

北海道エスペラントセンター内 tel(呼) 831-7248

通信販売による注文はハガキでセンターの方へ。

終りに、書籍の買付に際して、日本エスペラント学会、東京エスペラント社、朝明書房並びに関西エスペラント連盟からそれぞれ好意を受けたことを記しておきます。(沢谷雄一)

## 北見エスペラント協会 誕生 (Kitami Esperanto-Asocio, KEA)

かねてより準備が進められていた北見エス会(KEA)が7月1日より発足し、北海道連盟の道東における唯一のロンドが生まれました。会長には大島俊之さん(北見工大・助教授)が選ばれました。北見工大の学生を中心にエスペラントが広がって行くことを期待されます。現在会員は8名。なお、KEAの結成には、ウヰンクさん夫妻の来道(当初、北見市を訪まれる予定だった!)がひとつの契機になったとか……。

### 北見エスペラント協会

(Kitami Esperanto-Asocio, KEA)

(連絡先) 090 北見市公園町143 大島俊之方  
tel (0157) 25-8234

(例会場所) 北見市北3条面1丁目 喫茶「ホルガ」  
毎週月曜日 19:00~21:00

東 弘美	090	北見市高砂町20の4	23-6093
天野 久雄	090	北見市東陵町179の1 東陵ホテル内	23-6689
池本 盛雄	090	北見市北7条面1丁目	23-2436
大島 俊之	090	北見市公園町143	25-8234
榊原 凱彦	093-01	網走市字卯原内184の2	7-2059
坂下 正幸	090	北見市緑ヶ丘46-5 網走土現北見出張所	25-7311
津村 初雄	090	北見市三輪641-38	86-5001
永田 嘉雄	090	北見市東陵町179の1 東陵ホテル内	23-6689



## 旭川東高校エスペラント同好会のその後

牧 野 準 司

僕が「エスペラント」を初めて知つたのは中学3年の時、国語の教科書の中で、その時は多少の興味はあつたが、周りにエスペラントに関する知識をもつて人も見当らず、現実的なものとしては受けとめる事は出来なかつた。高校でクラブが出来たのを知り、説明会へ行き、何もわからないまま、ただ入会してしまふ現在に至つてゐる。

本当であれば「エス歴/年」と言えるところであろうが、勉強不足、努力不足の爲に、エスペラントの知識は皆無で等しく、今年の新入生と全くかわらないというのが實際である。第一、ウヌアも満足で出来てゐないから、自分の學ながらホトホトあきれてしまう。しかし、こんな情けない事ばかりも言つては行かぬ。北海道連盟で人つたのを良い刺激として、積極的に知識、実力を得るよう努力していきたい。

昨年6月中旬で出来、また/年で漸をない我校のエスペラント同好会、年が交わり設立り中心となつた3年生が卒業してしまつた時、3人だけになつたクラブにかなり不安があつたが、今の維持、運営だけなら素人でもけつこう出来ようである。しかし・・・

初めて生徒会のクラブ紹介で参加し、2分間という時間の中で、何をしゃべつていいやらとあれこれ考え

- ・エスペラント同好会というのがあるというのを強く印象づける

- ・親しみやすさを出し、気楽な気持ちで説明会にこれるような雰囲気

以上の2つを目標として、新入生45の名の前で講演説、まをして目標は達せられたのか、5名の新入会員を迎え、現在9人で活動中。/年生の中には独語仏語 etc. にかなり深く足をつつこんでいる者もあり、上級生が押され気味になる場面も。

5回行なつた集会で全員が全回参加しているので、かなり今後を期待はもてると確信している。

当面は2年生がいち早く実力をつける事と、同好会を部に昇格させる事を目標として頑張つていきたい。

東高エスペラント同好会と連盟会員としての活動、学習の爲に多くの方々の御指導と協力を心からお願いする。(高校3年生)

# En Sapporo.....

札幌 에스ペ란토會活動報告

## 第9期初級講座

5月8日から、中央タイピスト学院を会場に、毎週土曜日、6カ月コースで始まった。受講者は学生を中心に8名、うち女性3名だけとあつて、異変(?)ただし、2年周期で受講者数に変動があるというジンは今回も例外ではなかつた。(この中から次期の会の活動を担う laborantoj が育つはずです!)

講師は昨年に引き続き奈良隆泰。会費は全期6000円。テキストは La Teksto Unua、副教材として、新選エス和(900円)、和エス辞典(500円)、新エス講座 vol. 1(600円)、日常用語活用辞典(250円)、初等翻訳教室(250円)、歌集(200円)、それに月刊誌「エスペ란トの世界」が配布されます。

宣伝はダイレクトメール25枚、ポスター40枚、新聞は、道新、朝日、読売、赤旗のお知らせ欄に、それから中央区で発行されているあるミニコミ個人紙で大きく。効果のほどは、ポスター(2)、新聞(1)、ミニコミ紙(1)ダイレクトメール(4)と出た。

## 中級学習例会

毎週水曜日、エスペ란トセンターで。昨年5月から勉強はじめたテキスト「PAŝOJ AL PLENA POSEDO」(W. Auld 編 1,200円)はその第13歩をあゆんでいます。一步進むのに3~4週かかっているのが実情。

## 脱初級学習例会

5月からは、中央タイピスト学院に場所を移して毎週土曜日夜。テキスト「Konversacia Esperanto Kurso」(Szilágyi 著 500円)はようやくと第8課目のですが.....

Krome S-ro K. Kimura instruas elementojn de Esperanto al anoj de Junulara Pako de Oomoto en ilia semajna kunsido.

### Woessink 御夫妻歓迎会

5月9日(日)、札幌市内のある喫茶店で午後から連親主催の歓迎会を開きました。地元札幌はもとより、小樽、苫小牧からも旧い友人知人、そして新しい仲間が集まり、参加者は24名。話題も、日本に来る途中立ち寄つて来た中国でのエスベラント運動、UETAの財政状態から、超能力現象の話まで軟硬とりどり。もつとも、奥さんアキコ・ウーソインクさんの旧い友人知人である多くの参加者の関心上、ご主人 Evert Woessink 氏どう国祭結婚のいきさつがあつたようです。ただし、千歳空港での記者会見でも、このおまさんごもしつこく聞かれてので、日本的ジャーナリズム的質問でも二人とも一切ノーコメント。

二次会はエスベラントセンターで場所を移して UETA のラベナ失脚の話今年のアネ大会で協議されるかも知れない UETA の規約改正などについても聞くことができました。8時半過ぎごろやうやく散会。楽しい一日でした。



En la unua vico, la 3a de dekstre, s-ro Evert J. Woessink, kaj la 2a, s-ino Akiko Woessink.

八年ぶりの帰郷だ。「浦島太郎みたい」。カラカラと笑った。藤女子短大在学中、国際語エスペラントを学び、エスペラント運動に打ち込み、四十二年夏、渡欧。世界エスペラント協会(U.E.A.)本部の編集者だが、十人足らずのスタッフの中で二人の日本人だ。

☆た。た一人の日本人

・女ひとり 聖徳に飛び込む浦田は「世界平和のため」明快である。「世界連邦の思想にひかれ、国際問題に関心があつたから」と補足する。「ベネルクス三國やU.E.Cは世界連邦の、ひとつのひたすらと思いま



アキコ・ウーシクさん(39)

語が必要になるでしょう」  
「日本国内だって、ごらんなきが。エスペラント語運動は、ほかの国に比べ進んでいません。とくに若い人が目覚めています」。

☆父親の「世界連邦思想

中国東北部(旧滿州)で生まれ十歳で引き揚げてきた。世界連邦の思想は父親譲りだとか。その父親も結婚問題になると、一度は反対したそう。夫君はもろくエスペランティストでU.E.A.の役員。本職はオランダ高層裁判所の補理関係部門判事。ミセス・ウーシクによれば「太平洋のように寛大な人」だそう。

世界エスペラント協会の機関誌「esperanto」編集者。このほど夫君E・J・ウーシク氏と石狩管内広島町の実家へ帰郷。オランダ・アルンヘン市在住。

す」。

いま、世界八十五カ國に百万人のエスペランティストがいる。平和は言葉からと、世界共通語を広めようといふこの運動のすそ野は広い。

思想や南北問題なく、厳しい現実の裏の面でガマンホフ(一八五九—一九一七年)の遺した高い理想の灯も、足跡をせられてはいるのでは。

「私は、それは思いません。たつた二人の人間が使いはじめた言葉が、百年足らずのうちに、こんなに広がつたのです。英語もフランス語もロシア語も、国際語としては限界があるのさす。これから、ますますエスペラント

ひと

帰國の途中、中国世界語協会の招待で、生まれ故郷の中國へも立ち寄つてきた。中國もオランダも日本にとっては、第二次大戦の旧敵國だ。「中國人は、かつての日本を憎んでいても、日本人個人に嫉妬はない」と許してきます。オランダだって同じです」。

「男性に在ることだけに満足せず、彼等を匹敵、同志性を伸ばさねばなりません。何を思ふ人か」。

エスペラントとは「番頭者」といふ意味だとか。既知の言葉と綴りが異なる、單字まで変わらなかつた。旧藤浦田開子。

北海道新聞 1976 06 09 (朝刊)

\*\*\* AGADIRAPORTO de Hakodate Esperanto-Societo \*\*\*

Post la 39a Hokkajda Kongreso en Hakodate, bedaŭrinde estas ke nia movado ne vigliĝis. Por remalfirmi Esperantan kurson, ni ofte alvokis kunlaboron al la eduka komitato de la urbo, sed la financa malfacilaĵo de la urbo ne permesis al ni utilan helpon. Nuntempe ni penadas okazigi memvolan kurson, sed pro diversaj kauzoj ankoraŭ ne fruktiĝas la okazigo.

La kutiman amsidon ni havas preskau ĉiumonate. Zamenhofan Feston en la lasta decembro partoprenis 7 samideanoj. (I)

# 新会員紹介

## 吉田由美子さん

Ms Josida Jumiko

(札幌エス会)

現在タイプライターカセルスプロモーターとして活躍。趣味は旅行、テニス、合宿に参加して、エスペラント語を素早く習得した。マイペースで勉強していきたいと思っております。よろしく。『昨年オランダの初級講座のモグリ受講生！』

Si prave konfesas, ke Esperanto estas mirinda lingvo, ĉar en la kunloĝado Rafaŭ, la plijuna frato de M. Łaski ege boligis sian junan sangon... La foto montras ekskurson al lago Śikocu kun fratoj Łaski. (uekstretre M. Łaski, kaj meze nia nova membro "Junjo")



# エスペラント普及一筋

## 広島出身の女性 オランダから里帰り

オランダの世界エスペラント協会、機関誌や出版物の編集に  
会(UEA)本部(ロッテルダム)の職員として、エスペラント語の普及に情熱を注いでいる北海道出身の女性吉田由美子、エスペラント語が経て経たれた三大と通れただって八年ぶりに、里帰りの、家族や仲間の出迎えを受けた。

アキコ・ウーシンクさん(左)旧姓・未田明子さん(右)で、妻家は石狩管内広島町。北大理学部の仕事員をしていたが、四十三年、UEAのスタッフを志してオランダ

八年前に里帰り、千歳空港で家族に出迎えられたアキコ・ウーシンクさん(左)と主人



途中、中国世界語協会の誘いで北京に立ち寄り、中国のエスペラ

ント運動を視察。四月末に帰国してから、沖縄県で開かれた全国合宿に参加して、五月後の全日空機で千歳に着いた。

空港には父親の志南一さん(父)や北海道エスペラント連盟の天谷雄一さんらが出迎え。信一さんは一度、オランダを訪れて明子さんと対面しているが、久しぶり

の再会に嬉しげな笑顔を浮かべていた。明子さんは十月は日本に帰国、東京アジヤホテルを回ってオランダに帰る。

記事の中に「**4月**は10日に帰国」  
とあるのは、  
北海道に於ける  
の誤り。

# *Kiu sian langon katenas, Dio lin benas.*

NARA Takayasu(Sapporo)

Ĝis antaŭ kelkaj monatoj mi flanklaboris en iu radiostacio. Mi laboris por iu programero, kiu konsistas el leteroj de aŭskultantoj. Al tiuj leteroj, konfesantaj diversajn afliktojn, malkontentojn kaj maltrankvilojn en la vivo, iu viro, kiu abunde spertis diversajn travivaĵojn, respondas en la programero. Ĝi nomiĝas-----, bedaŭre, la nomon mi ne povas malkovri ĉi tie, ĉar mi rakontos al vi sekreton de tiu programero, kiun mi mem tenas ĝis hodiaŭ....

Malkaŝe dirite, leteroj senditaj al la radiostacio de aŭskultantoj-konsultantoj estas preskaŭ ĉiam malmultaj, kaj preskaŭ senescepte malriĉaj je enhavo. Tio estas vera fakto. Do, kiel oni kompletigas la programeron? Necesas leteroj kontentigaj en enhavo. Jen mi, brodkasta verkisto! Anstataŭ veraj aŭskultantoj-konsultantoj mi skribas leterojn kun diversaj temoj por ĝi. Jes, mi trompadis ĉiujn aŭskultantojn. Fariĝis mi, jen 20jara fraŭlino, kiu perdis amon, jen 13jara mezlernantino, kiu kverelis kontraŭ sia amiko, jen 22jara novelzino malkontenta pri sia edzo, jen 25jara laboristo afliktiganta pro sia laboro, jen eĉ 45jara patrino, kiu estas maltrankviligita de sia filo, jen.....

Verŝajne al mi estas dotita la talento roli diversajn karakterojn, same kiel la respondanto, kiu havas 20 vizaĝojn, (Ĉu vi komprenas min, s-ro Akeĉi?), ĉar oni diris, ke multaj el tiuj kiuj eĉ nur unufoje aŭskultis la programeron, ne povas sin deteni de larmoj. Neniom da troigo, sed nur oni diris tiel!? Ĉu komprene?

El tiu laboro mi lernis multe da aferoj. Ekzemple, iam mi, kiel 17jara knabino, skribis manuskripton. Ĝi temis, ke ŝi abomenas sian patrinon pro ŝia malordoneco. La patrino ne havas sian propran hobion, sed rigardas nur televidon, kaj ne povas plenumi eĉ hejman laboron. Laŭ mia opinio dekkelkjara knabino certe devus havi tempon kontraŭstari al la patrino. Mi atendis eĥojn jesajn al la enhavo de la letero, sed male al mia ekspekto preskaŭ ĉiuj leteroj senditaj al la radiostacio havis opinionon kontraŭ la ŝia, nome la mia. Unu fraŭlino, kiu ne havas patrinon, skribis ke ŝi (t.e. mi) devas danki havi la patrinon kaj tro sin dorlotas. Alia, kiu amike vivas kun sia dua patrino, kompreneble riproĉis mian opinionon.

Mi malkaŝis ĉi tiun sekretan rakonton nur al tiuj, kiuj povas legi Esperanton, ĉar mi kredas, ke la legintoj de tiu ĉi rakonto ne disbabilos la sekreton.

## Ĉu vi iam renkontis urson?

BLUA Dorsosako

Mi havas tre interesajn amikojn. Pegoj, lanioj, paseroj, vulpoj, sciuroj, termusoj, fiŝoj, araneoj, kaj akaroj. Ĉi tiuj estas amatinoj de miaj kolegoj kaj por renkonti la amatinojn ili nun vagadas en arbaroj, riveroj, kaj montoj.

La plej granda animalo en Japanio estas bruna urso, kiu vivas nur en Hokkajdo. Kaj ĉi tie kolektiĝas junuloj kiuj senkompare amas ursojn.

Do kiamaniere ili efektivas ŝancon rendevui kun ŝi? Vi ja scias ke estas malfacile renkonti tiun grandan amatinon. Kompreneble ili projektas la rendevuon aŭ en arbaro aŭ en monto kie troviĝas ŝia hejmloko. Sed ŝi malofte venas urbon. La vizito ŝiam konfuzegas homojn, kaj kaŭzis kelkajn tumultojn en ĉiu jaro. Kia malĝoja afero. Ĉu la fatalo destinis al ili ĉiajn mizerojn?

Hodiaŭ mi rakontas al vi grupon kiu studas brunan urson. Mi prezentas al vi fragmentojn de ilia agado energia. En ĉiu jaro la grupo projektas ĝeneralan ekspedicion kiu konsistas el kelkaj grupoj. Kaj la esploro daŭras ĉirkaŭ du aŭ tri monatojn. La tria ekspedo en montaro Taisetu komenciĝis somere en 1972. Ĉi tie mi eltiru el dokumento de la kvara grupo.

### 30/VII, hela vetero

Ni alvenis al varma fonto Aizankei je la 3-a posttagneze. Alpistoj sciigis al ni ke ili vidas multajn postsignojn de urso sur la okcidenta deklivo de monto Nagayama.

### 31/VII, hela vetero

Nur malnovajn postsignojn malmultajn.

Lacaj ni revenis.

### 5/VII, hela vetero

Dum tri tagoj ni tendumas sur montego Blanka Nubo. Kaj 7 tagoj jam pasis de kiam ni komencis esploron. Ni gajnis multajn fekaĵojn kaj postsignojn de manĝado. Bedaŭrinde ni ankoraŭ ne havis ŝancon observi urson. Ankaŭ hodiaŭ nur postsignojn.

Urso! Urso! 'K' krias al ni kiu revenas kun neniu rikolto. Sed ni ekkuras kun vana espero. Finfine ni povas renkonti nian amatinon. Ni freneze aŭ observis aŭ fotis ŝin dum du kaj duonhoron. Nipovas observi ekskrecion kaj manĝadon (elterigadojn). Tre dika urso!

Ni devas rifuĝi malgraŭvole en kabanon. Multaj homoj en la malgranda kabano. Neniu eĉ eliras por urini. Nur bravulo malfermis la pordon kaj plenumis en kontraŭvento.

### 6/VII, Pluvo, Forta vento

Tutan tagon ĉiu estis enfermita en la kabano. Ni verdire eksentis urson terura.

7/VII, hela vetero

Ni studas ĉirkaŭ la kabano. Sur la suda deklivo de Hakuun(Blanka Nubo) ni povas gajni multajn postsignojn kaj eĉ trovis litlokon. Je la 18:40 - 19:30 urso sin aperigas. Ŝi tute ne rimarkis nin.

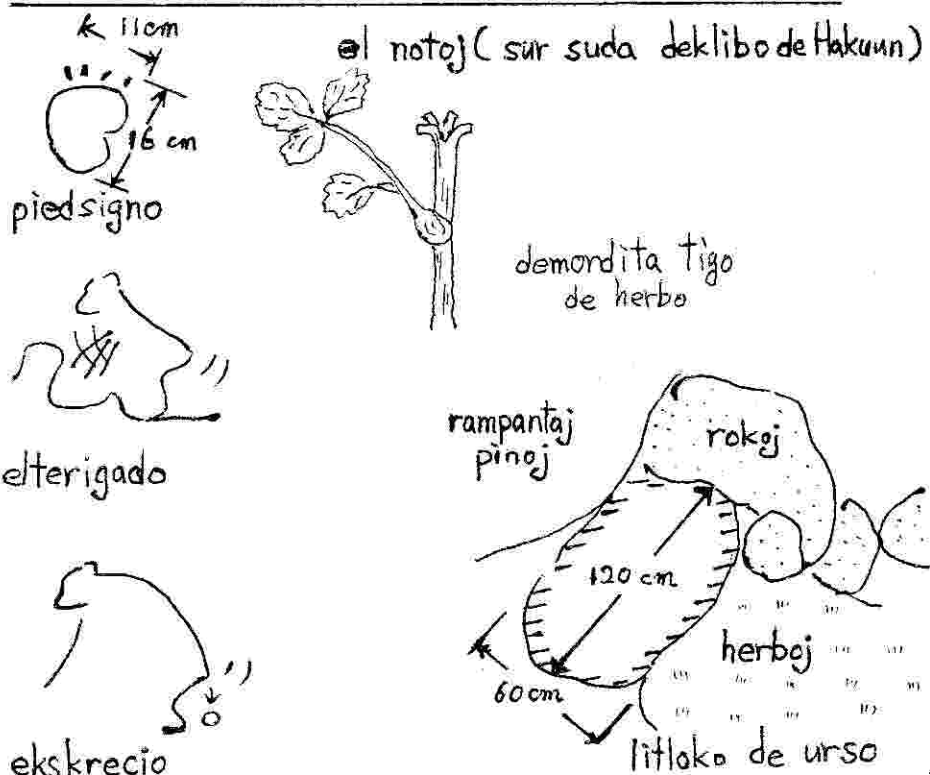
8/VII, hela vetero

Urso aperas! Ni salte ellitiĝis kaj eliris. Sed ŝi baldaŭ kaŝis sin ek la arbareton. Tri ĉasistoj venis el Kamikawa. Je la 7-a urso ree aperas. Ĉasistoj pafadis ŝin. Ŝi forkuris en la intermonton. La ĉasistoj postkuras la urson. Ni nur atendas. Je la 11-a ni konfuzitaj alkuris al la lokon. Sed ni jam ne povas vidi ŝian bravan figuron. Nur kadavro kuŝas antaŭ ni. Ŝi estis maldika, pezas 60 kilogramojn, ni supozis. Kontraŭe ŝi vivanta ŝajnis al ni tre dika. Ni mezuris korpon de urso kaj ricevis la stomakon kiu estas plenplena de sorpaj beroj. Gajaj ĉasistoj kaj ni konfuzitaj.

Ni senkuraĝigitaj nur trinkas senvorte. Viskio hodiaŭ gustas al ni aparte maldolĉe. Ursovento murmuregas ekstere. Ni sopiras al la hejmo.

Nia amata estu trankvila.

Bonan nokton!





Iĉikaŭa T. (Hakodate)

En ĉiu aŭgusto mi rememoras iun aferon en la malnova tempo. En 1945 mi estis en iu roto, kiu restadis ĉirkaŭ urbo Macudo, gubernio Ĉiba. Duonsubteraj kazernoj troviĝis tie kaj ĉi tie inter arbaroj aŭ kampoj. Ĉi tiu trupo estis radio-armila trupo de la terarmeo. Kvankam ĝi restadis enlande pro tio, ke ĝi estis nove organizita, sed ĉiam ni suferis nesufiĉon de manĝaĵoj kaj materialoj. Pro nutromanko kaj peza laboro, kvarono de la trupo estis malsanuloj. Aliflanke, lukse fartis oficiroj, kiuj rabis manĝaĵojn aŭ sakeon destinitajn al soldatoj. Por soldatoj nesufiĉaj manĝaĵoj, peza laboro, senkialaj pugnadoj kaj diversaj linĉoj ktp. Tio estis vere infero surtera.

Iam unu soldato fuĝis el la roto, sed post kelkaj tagoj li estis arestita de ĝendarmaro. Li estis resendita al la roto. Ĉirkaŭ du semajnoj li estis enfermita en malvasta ĉambro en iu kazerno. Ĉiutage 24 horojn por gardi lin, ni pikedis unu post alia. Forprenite la butonojn, ŝnuretojn kaj insignojn, li silente sidis sur la planko de la malluma ĉambro. Oni diris, ke al li estas donita nur malmulte da salo krom ĝaŭliango.

Post tio, li refoje fuĝis. Tiam ja estis antaŭ kelkaj tagoj de la malvenko. Pro la konfuzo de la malvenko, mi ne scias kiel li fariĝis. Post duonmonato de la tago de la malvenko, nia roto estis malorganizita. En la bela mateno, ni estis liberigita de la armeo kaj iris ĉiu hejmen. Tiam mi pensis, ke ni liberiĝis per la ordo, sed li sin liberigis per sia volo.

POST LA REDAKTADO

- \*Ni rezervas kelkajn manuskriptojn de s-ro A. Hoŝida koncerajn al la nun tradukataj jukaroj por la sekvanta n-ro 60.
- \*La artikolo de s-ro Iĉikaŭa estis kontribuita al iama "NEG-FLOKOJ" jam antaŭ kelkaj jaroj, sed ne prezentita pro likvido, kaj LEONTODO ne eldoniĝis en somermezo.....
- \*De la sekvanta n-ro 60 ĉefe redaktos Leontodon pli junaj membroj, s-roj Nara T. kaj Satō T. kun freŝa sento.
- \*Dum la longa tempo mi devis, vole nevole, preni sur min la taskon "redakti" (pli ĝuste dirite, "kolekti k korekti"), tamen mi ne scias, kiom da membroj legas ĉiun numeron kun kiom da atentemo. Necesas, ke oni havu, ekzemple en semajna kunsido, okazon kune legi la organon kaj babili pri la enhavo, se temas pri artikoloj skribitaj en Esperanto!
- \*Ĉu la "grizaj" funkciuloj registaraj estos arestitaj antaŭ ol ĉi numero estos en via mano? Skandaloj sur skandaloj formas la historion post la milito, kiuj neniom koncernas ni ni popolaranoj krom pagi impostojn. (Sawaya Y.) 1976 07 19

## Vojago dum unu semajno

SATO Tadatosi

En la 2a-5a de majo, dum kvar tagoj okazis la kunloĝado en Yaizu, kiu estas ĉiujare okazigata.

El Hokkajdo partoprenis tri geesperantistoj, du fraŭlinoj kaj mi. Ni devis elekti apartajn vojojn. Ĉar ili havis sufiĉe da mono, sed ne libertempon, kaj mi havis ne monon, sed sufiĉe da libertempo. Mi devis elekti la plej malkaran vojon.

Post la veturado dum dudek du horoj mi alvenis al Ueno. Estis malvarmete. La maltrankvila atmosfero de la platformo kaj laciĝo post la veturado pelis min en vagonon al Yaizu, kvankam mi volis eliri el la stacidomo kaj promeni en Ueno. En la vagano estis multe da homoj, kiuj ĝuos libertempon laŭ apartaj manieroj. Speciale estis multaj, kiuj havas ilojn por fiŝado.

Mi elvagoniĝis ĉe Atami. Mi volas rigardi ĉi tiun faman urbon. Ĉirkaŭ du horojn mi promenis sur la strato, rigardante grizan maron, tropikajn plantojn, kaj multajn konstruaĵojn. Estis ankoraŭ malvarmete kaj malsekete. Mi pensis paŝante; "Vojagi sola ne estas tiel ĝoja kiel oni diras. Kaj ĉi tiu Atami, kial oni deziras viziti ĉi tien? Estas nur konstruaĵoj en la urbo, ĉu?"

Alveninte al Yaizu, mi serĉis tiun, kiu havas verdan stelon, ĉar mi pensis, ke kelkaj esperantistoj certe estas tie. Post mallonga serĉado mi povis trovi unu maljunulon kun ĉarma knabino. Ni salutis reciproke kaj decidis iri por matenmanĝi. Lia nomo estas Baba, kaj la knabino estas lia nepino. Ni interparolis dum ĉirkaŭ tri dek minutoj en manĝejo antaŭ la stacidomo. Ili estas Tokianoj, kaj la knabino estas lernantino de mezlernejo. Hazarde ŝi intencis partopreni en la sama klaso, kiel mi.

Ni kune veturis al Junulara Domo, la kunloĝadejo. Ĝi estis malgranda por gubernia. En la domo ankoraŭ estis nur kelkaj geesperantistoj. Tamen "Esperantio" jam estis elfarita. Ili parolis nur esperante! Certe tiu ĉi fakto estas natura, ĉar ili estas esperantistoj. Tamen la fakto timigis min.

"Ĉu ĉi tie ĉiuj devas paroli nur esperante?"  
Mi sentis, ke nova lacigo estas ŝetata kontraŭ mi.

En la akceptejo estis s-roj Nisikawa, kasuya, s-inoj Kikusima, Katogi, Wasio, kaj aliaj. El ili mi konis nur s-ron Nisikawa. Mi nur sciis iliajn nomojn koncerne aliajn. Mi alparolis al s-ro Nisikawa, kvankam al mi estis maltrankvile ke li ne memoras min.

"Ĉu vi memoras min, sinjoro?"

Li tuj respondis.

"Hoo, vi!"

Li bone memoris min. Li ŝajnis al mi pli juna ol tiam, kiam mi vidis lin en la kunloĝado en Otaru, eble ĉar li vestiĝis "Jeans".

Post lotado por decidi dormoĉambron ni dividiĝis laŭ grupoj. Mi partoprenis en la grupo de s-ro Konisi. La teksto estas "La Teksto Unua". Mi jam finis la tekston. La celo partopreni en la grupo de s-ro Konisi estis rigardi kaj scii kiel gvidi elementan kurson de Esperanto. Ĉar ankaŭ mi iam fariĝos la gvidanto. Nia grupo havis ses personojn. Ĉiuj, krom mi, estis komencantoj. (Cetere ankaŭ mi estas komencanta esperantisto!)

Nun mi devus skribi ne nur pri mia privata afero, sed pri aliaj ĝeneralaj. En la kunloĝado partoprenis ĉirkaŭ 100 geesperantistoj. El fremdaj landoj venis 5 geesperantistoj inkluzive ges-rojn Uusink. 16 grupoj por lernado kaj ĉirkaŭ 10 grupoj por aktivado estis aranĝitaj. En la domo ne estis alia grupo krom ni, esperantistoj.

Ĉe la kunloĝado oni celis, ke ĉiuj mem faru ĝin. Certe bona celo. Zorgantoj deziris nur helpi tiun, kiu volas fari ion, kvankam tio estas grava. La reprezentanto, s-ro Nisikawa diris ĉe la unua vesper-kunveno pri tio, kaj daŭrigis siajn vortojn: "Eĉ ĉe Interkona Vespero okazigota en hodiaŭa vespero ni nenion decidus, kion ni faru."

Mi partoprenis en la kunveno por decidi faronton en Interkona Vespero post vespermanĝo. Venis nur kvar inkluzive s-ron Nisikawa.

Mi demandis al li:

"Jes, la celo estas certe bona. Tamen tio ŝajnas al mi malfacila kaj malklara. Ĉar mi pensas, ke estas malfacile, ke oni decidu ion por ĉiu tago en ĉiu tago."

Li respondis:

"Tio, kion ni volas diri estas, ke nin enuigas kunloĝado, en kiu zorgantoj ĉion preparas kaj faras."

En la dua tago vespere okazis parolado de ges-roj Uusink. Bedaŭrinde mi ne bone komprenis la enhavon de ambaŭ ges-roj pro la manko de mia kapablo. Mi apenaŭ komprenis, ke s-ro parolis pri UEA, kaj s-ino parolis pri la vojaĝo.

En la tria tago vespere okazis Gaja Vespero, Distrakto-Dazaro. Ĉiuj apartiĝis, kaj faris grupojn laŭ siaj intencoj, kaj jam komenciĝis agadoj. Jen kantantaj, jen



# La Tutlanda Kunloĝado en Yaizu '76

ŜIBATA Soko (Sapporo)

De la 1-a de majo ĝis la 5a, mi unufoje partoprenis la Tutlandan Kunloĝadon en Yaizu. Mi elveturis el Sapporo en la vespero de la 27a de aprilo unue por viziti Kioton, kaj mi retroiris al Yaizu kun espero kaj maltrankvilo. Kiam mi atingis la Junularan Domon de Yaizu, multaj partoprenantoj jam estis tie. S-ro Sato venis pli frue ol mi.

Dum la kunloĝado mi havis grupan lernadon antaŭtagmeze, grupan agadon posttagmeze kaj komunan okazigaĵon vespere. Kiel la komuna okazigaĵo, en la 1-a tago okazis Interkona Vespero, la 2an tagon Prelegoj de ges-roj Woessink, kaj la lastan tagon Gaja Vespero.

Mi elektis la 4an el la elementaj kursoj. Nia gvidanto estis s-ro Jamasaki motohiro, profesoro de Universitato de Sinsuu. Li gvidis nin tre severe, tamen samtempe nin amuzis. Kiel tekston, ni uzis "Rakontu, samideano". Ĉar mi preskaŭ ne antaŭlernis la tekston, mi devis konsulti vortaron dum la tuta libera tempo.

La 2an tagon posttagmeze, mi partoprenis en grupo por propagandi Esperanton sur strato, kiun prizorgis s-ro Mucukubo. Bedaŭrinde tiam pluvetis, tial ni nur desegnis propagandilojn.

Kaj ĉar ankaŭ en la sekvanta tago pluvis, kaj pro la alia kialo, post ĉio, ni devis rezigni propagandon sur la strato. Venontjare, mi deziras nepre tion fari. Kvankam mi restis negativa partoprenanto, mi povis pasigi tempon agreable. Mi dankas al la plenumkomitatanoj!

## 北海道エスパーントセンター 維持員募集

センターが希足して満2年目を迎えました。北22条から現在の平岸へ移転して1年が過ぎました。地元札幌エス会の学習例会会場・外国から来た同会の来訪会・来札する道内外のEsperantoの宿泊所、連盟委員会や行事打ち合わせの準備・会合場所と多様な機能を果たしています。そして才40回大会を機に、連盟図書部がセンター内に設置され、本格的エスパーント書の供給が行なうことになりました。おほす。私たちの運動の城として、その存在が重要な位置を占めるようになってきました。現在1か月の維持に、家賃(雑費共)15500円がかかります。公共料金の値上げにもおほす。後失 出費が増大しています。現状状態は不安定です。一人でもより多くの維持員が必要とされます。維持費は1円、1か月500円(年額6000円)です。会計の都合上、数か月まとめて払って下さるとおほす。送金は郵便振替で「北海道エスパーントセンター」振替番号(小樽)22427 寄付金も歓迎します。(藤村 忠明)

Vojaĝi tra la bela lando, Hokkaido

Iwanaga kazuo (Aiti-ken)

(1) el Tomakomai (la 7an de marto, 76)

Kara Sinjoro,  
Ekde la 3-a ĝis la 6-a mi zigzagis en la provinco Orient-Norda. En Niigata de la supro de iu magazeno mi vidis la foran montoĉenon Iide. Kaj en Akita kaj en Aomori mi spertis panoraman vidon: ekz. la monto Taihei-zan (la nomon alprenas iu sakeo) kaj la monto Hakkōda.

Ĝis la dua karto!

(2) el Obihiro (08-03-76)

Kara Sinjoro,  
Mia vojaĝo ekfloris en koloroj de bluo kaj la blanko: aperiĝo de la monto Oonuma-komagatake min surprizis, kiam mi plenokule sidas ĉe la fenestro de la trajno. Kaj la monto-ĉeno Niseko en la pure blanka ŝalo okulumis ĉarme al mi(?). Ĉielo estis blua sen pecetoj de nubo. Vespere ankaŭ la monto Siribesi igis min ĝoji per sia korpo kvazaŭ elefanto kuŝanta.

Hodiaŭ mi rigardis la panoramon de la montaro Hitaka, stare de la flanko de Tokati. Ĝis Hiroo mi iris per trajno, ĝis Samani per aŭtbuso kaj denove venis al Obihiro. Morgaŭ mi vizitos sinjoron SATOO tadatosi en Aibetu.

Antaŭhieraŭ (la 6an) mi tranoktis ĉe la patro de mia amiko en Eniwa. Li loĝas nur kun sia edzino. Li mastras la modestan butikon en Simamatu-zawa, kie li vendas mielon.

Mi jam skribis karton al s-ro Sawaya al la Centro en Sapporo. Postmorgaŭ mi lin vizitos.

via Iwanaga

(3) el Kamikawa (la 12an de marto)

Saluton el Kamikawa!

Hieraŭ mi tranoktis ĉe la domo de sinjoro Satoo en Aibetu, dek ok jara junulo jam fininta la tutan kurson de la liceo (Asahigawa higasi-kookoo). Li kaj la gepatroj min afable kaj varme bonakceptis: la vespera bankedo estis por miaj stomako, okuloj kaj oreloj DIAMANTO, kiu apartenas ne al madono, sed al mi.

via Iwanaga

p.s.: La juna amiko lernema nun hejme atendas alvenon de la anonco pri la rezulto de la ekzameno por eniri la U.V.-on. La 10-an mi vizitis ankaŭ la Centron en Sapporo.

(4) el Samani (la 15-an de marto.)

Kara amiko,

Hieraŭ vespere mi vizitis sinjoron Mukai t kaj tranoktis ĉe la domo. Antaŭ ol mi iris al lia loko, mi skribis karton el Kusiro. Sed ĝi ankoraŭ ne venis al li kaj tial mi sen antaŭsciigo aperis antaŭ li. Damne! Li, tamen, min bonvenigis kaj afablis min regali per manĝoj, paroloj kun entuziasmo kaj tre komforta lito. La edzino kaj la gefiloj entute min akceptis nature, kio ege min ĝojigis.

Preskaŭ du semajnojn vojaĝis mi kvazaŭ aeroplano sen kondukilo: la celo iri al la patro de mia amiko jam plenumiĝis. Sakeo, kiun mi kunportis, la fama Tai-hej-zan donis al li plezuron. Poste mi ekvagis sen celo. Bedaŭre, Hokkaido ekis printempigi, kiam mi venis ĉi-landen. Anstataŭ sperti la vintran vivon mi renkontis fidele kelkajn homojn, kies nomoj kaj adresoj vi sciigis al mi.

Post kiam mi diris al s-ro Mukai ĝis-la-revidon, mi bone povus respondi la demandon, kial mi venis nun ĉi tie - al Hokkaido.

Amike, via Iwanaga

(5) el Kusiro (17/marto/76)

Saluton el Kusiro!

Kara amiko,

Vizitinte s-ron Mukai kaj la patron de la amiko mi denove kaj ree venis al la urbo lontana. Verdire en ĉi tiu vojaĝo mi trifoje venis ĉi-tien. Ja, oni nomus min stultulo.

Estis ekster mia atendo, ke mi tiel zigzagis, ke en la saman urbon mi eniras senintence.

Sed, sinjoro, mi tamen celis al la biblioteko por la urbanoj. La beleco kaj grandeco de la konstruaĵo mirigis min. Sur librobreto, mirinde, troviĝas ankaŭ libroj, kiujn la muzeo de moderna literaturo japana eldonis en la formo de la unua eldono en "la Reeldona kolekto de la ĉefverkoj de japana literaturo". Feliĉe mi trovis "Homoj sur la maro" de Hayama Yosiki kaj kun peta voĉo mi diris, ke oni ĝin pruntedonu al mi.

De s-ro Mukai mi aŭskultis interesan rakonton pri la biblioteko en Abasiri. Lia grand-onklo ĝin fondis kun ideo protesti kontraŭ malkultureco en la provinco kaj poste fariĝis ties estro, 22 eksiginte de sia profesio.

via I.K

p.s: ĝis la tago, kiam la poŝmono neniom-iĝos mi daŭrigos la vojaĝon kaj ĉirkaŭ la 25a tago mi reiros hejmen.

(6) el la ŝipo Yootei-maru (la 2lan de marto.)

Kara Sinjoro,

Mi nun sidas ĉe la fenestro sur la seĝo de "ferry-boat" Yootei-maru. Nu mi rememoris, ke al vi mi skribis karton el la ŝipo transiranta al Aomori ĝuste antaŭ 9 jaroj.

Pli ol duonmonaton mi loĝis en Hokkaido kaj mia poŝmono apenaŭ restas malpli ol 1.000 jenoj. Kiam mi estis 19-jara kaj hejmen ekironta de la haveno Hakodate, mi havis pli multe da monoj, vojaĝinte dum du semajnoj kaj vivinte per la nutro de Pano kaj Lakto kaj de manĝaĵoj ĉe la hejmo de Hokkaido-anoj. Siatempe tre malofte mi manĝis ĉe restoracio. Kompreneble, ankaŭ en ĉi tiu marta vojaĝo mi ricevis la manĝojn de la loĝantoj. Kaj sub via instigo viziti esp-istojn kaj sub konsilo paroli kun ili en Esperanto mi manĝis kaj tranoktis kune kun tiuj homoj.

Kvankam mia vojaĝo ne havas nepre menciindan, mi devus diri, ke vizito al sinjoro Mukai kaj al la patro de mia amiko riĉigis la vojaĝon. Pro la manko de mia poŝmono mi ne iris al Esasi kaj tial s-ro Kitasiro estus vane atendanta mian viziton, mi kredas. Jes, mi skribis al li, sed en la vojaĝo mi perdis mian kajeron, sur kiu estis skribita lia adreso.

el sur maro salutas via Iwanaga.

\*\*\*\*\*

- rimarko -

Tiu ĉi ses leteretoj ĉiuj estis adresitaj al s-ro Mituisi, kompetentulo pri Hokkaido-vojaĝo. S-ro Iwanaga estas 28-jara samideano. Pere de la teksto de la leteroj oni trovas lian personecon kaj karakteron. Jes. Li estas "good fellow". Li amas literaturon kaj montiradon. Li vojaĝis tra Hokkaido per la ekskursaj biletoj.

エス・ポラント講習会全盛英通ポスター 1枚 50円(送料別)

1971年に作製したのが使い果にいらしたので、昨年の大会協議の決定に従い、新しいポスター1000枚を印刷しました。2色刷。25×40cm。日時、場所、会費、問合せ先欄に書込みが出来ます。後援として北海道エス・ポラント連盟、北海道エス・ポラント協会の名が印刷されています。甲山先生は北海道エス・ポラントセンター(064 札幌市豊平区早稲1-8, tel. (011) 831-7248)《本庄虎の爪》



## Mi opinias...

Wakkanai, la 29an de marto, '76

Kara amiko,

Pardonon, ke mi ne skribis leteron al vi longe. En la lasta semajno mi feliĉe povis akiri la libron "La Danĝera Lingvo". Mi ĝis hodiaŭ apenaŭ la duonon legis, do mi ne povas ĝin kritiki sufiĉe, tamen antaŭe mi legis artikolon titolitan "Socialismo kaj Esperanto", japane skribitan de Kurisu K, la tradukinto de la libro, sur monata gazeto "La mondo de Esperanto" (Esperanto no sekai), eldinita por neesperantistoj. Mi povas iomete supozi internan signifon de la libro.

Mi naive opinias, ke en la pasinta tempo imperiismaj registaroj devis subpremi popolojn por gardi sian rajton de ekspluatado, konsekvence ili rifuzis permesi liberon, kaj komenciĝis la persekuta historio de popoloj. La sama sorto trafis Esperanton. Mi esperis ke la venonta epoko en demokratismo nepre devos libere akcepti Esperanton, sed spite al tia ŝajno komunismaj landoj preskaŭ ne bone kondukis Esperanton. <sup>Kial?</sup> En komunismaj landoj oni flegmas pri Esperanto? Al mi ŝajnas, ke ili abmenas internacian kritikon pri ekonomia vivnivelo de laboristoj kaj nivelo de la kulturo, ĉar komence ili estis tre malriĉaj, kaj konsekvence aperis diversaj malĝojaj aferoj, ili devis tegi mizerajn partojn for de la monda vido, do fermis siajn per la kulteno de fero aŭ de bambuo.

Antaŭ dek jaroj mi vojaĝis en orienta eŭropo dum du monatoj. Tiam ni oftege parolis kun tiulandaj laboristoj pri pensia sistemo, kuraca sistemo, loĝeja sistemo aŭ ekonomia vivnivelo de laboristoj. Ili demandis al ni kaj ankaŭ ni demandis pri tiuj temoj en amikeca atmosfero. Ĉiam ili respondis al ni kun plena memfiero kaj gajemo, ili neniom havis mallumecon. Tial mi kredas, ke laboristoj en la tuta mondo ĉiam volas paroli kun alilandaj laboristoj kaj bezonas Esperanton. Registaroj de komunismaj landoj jam havas memfidon pri ekonomio kaj politiko, ili devas akcepti sincere Esperanton, sekvante popolan esperon. Se la registaroj abomenas Esperanton pro la neŭtrala ideo, komunismo finfine ne estas demokratismo.

-----  
Mi deziras al vi sanon.

via

Iwamoto K.

~~~~~  
**Leontodo** への投稿規定 ① 日本語のときは必ず横書の原稿用紙

に書いて下さい ② イス文の場合はタイプで打つか、読みやすい活字体で。

③ 各ロンドの活動報告は必ず年誌に送って下さい! (例会でどんなことをしているかも含めて。) 原稿の送り先 LEONTODO 編集部 \*次号 60号は10月頃?

064 札幌市豊平区平岸1-8, 北海監エスプラントセンター内

Miçurin と 渥美 梓 雄 氏

相 沢 治 雄 (札幌)

2366

ロシアの新種育成家ミチューリン[MICURIN]

渥 美 梓 雄

(岐阜高等農林學校園藝學教室)

(農業と園芸第10巻第10号 1935年 昭和10年10月1日発行  
の渥美氏の記事題字)

戦争前なら農業とまで行かなくとも園芸に興味を持つ人、あるいは庭いじり位する人ならアメリカのルーサー・パーバンク (Luther Burbank / 1855 ~ / 1926) の名前位知つていたを、また同時にソ連のミチューリン (Ivan Vladimirovich Michurin / 1855 ~ / 1935) の名前も知つていた。

パーバンクは、ランカスターの生れで、とくにバラ科の果樹育成に力をそそいでいた。彼の育成したもので有名なのは、今でもどんな所でも見られるシヤスターデージー (和名アメリカハマギク)、面白いことに学名が (*Chrysanthemum Japonica*) がある。又パーバンクのいももあつたが今では市場で見られないと思う。当時彼のパーバンク商会を通じて多量の種子が日本にも輸入されていたから農家の人達でも彼の名前位は知られていた。

しかしミチューリンについて人々に広く知られるようにまつたのは1937 ~ 8年頃ではなかつたらうか。ミチューリンの事が一般で発表されたのは1935年 (昭10) 7月6日東京朝日新聞にのせられた長岡義夫氏 (陸軍のロシア語の先生で経理学校の教官であつたように思うと渥美氏の手紙にあつた。相沢一) の記事が最初ではなかつたらうか? 今ではミチューリンの事はすっかり忘れられているので、一寸彼の略歴を長岡氏の記事によつて紹介する。

ミチューリンは1855年の生れで家庭は裕福ではなく高等教育など受けてはいない。せいぜい中学程度であつたらしい。20才の頃コスロフ駅の貨物を扱う駅員であつた。この当時ロシアでは果樹園芸は全く科学として認められず、従つてブドウやももやあんずなどは貴族か地主達でなければ食卓に上せる事なく、それも西欧やコーカサスから輸入し、その果物の価格は1年500万ルー

ブルを越えていた。ミチューリンは耐寒性の果樹を改良し利用価値の高い新品種をあまり多く農民に栽培させようと思ひ立つた。この理想さえ実現すれば、ぜい沢品とされている果物も労働者や農民の副食物となり果樹の栽培は農村の生活に余裕を与え、貧農や中農を凶作の飢餓から救うことができる。無教育、無資本で育種場を開いたミチューリンは、 $1907$ 年に近い年月を失敗をくりかえしつつ苦斗した。彼が $30$ 才を越えたころ有名なメントール法（交配不可能とされている $2$ 種の植物をつぎ木で性質を近づけ交配を可能にする予備栄養接近法で遠隔交雑もおこなわれるようになった。）を発見して従来の植物学者の説をくつがえしたのである。 $1905$ 年（日露戦争終結、第一次ロシア革命、第一回万国エスペラント大会、ピヤトリスクのユダヤ人大虐殺もこの年頃である。）すでに彼は $50$ 種近い新果樹を育成した。しかし育種場の経営は逼迫を極めていた。彼は政府で自分の育種場を基礎として官立の果樹園を創立してもらいたいと嘆願したがつめをく拒絶された。

この頃、 $1898$ 年の冬、北アメリカでは未曾有の冷害に見舞われ果樹の被害甚大であり 櫻桃等はアメリカもカナダも文字通り全滅となつてしまつた。ところがまどなくカナダで開かれた全米果樹栽培者大会で、欧米種の櫻桃が日本等から立枯れとなつたにもかかわらずロシアから輸入した「プロダロードナヤ」だけは $1-30$ 度の寒気で耐えて見事に開花結実した事が報告された。そしてこの新品種を育成した人がロシアの学会から全く黙殺されている無学の駅員上りの貧しい園芸家だといふので集まつた学者は皆驚いてしまつたのである。このミチューリンの研究はアメリカの学界で大センセーションを捲き起こした。そしてアメリカ政府はこの学歴もない園芸家のもとで $1900$ 年から留学生を派遣しはじめた。

$1902$ 年ミチューリンはアメリカから招へいを受けた。年々 $1000$ ドル植物採集のため専用の汽船まで提供するという事であつた。しかし彼はロシアの田園と農民を見ずる気になれずこの招へいを断つた。

世界大戦（第一次 $1914 \sim 1918$ ）はロシアの田園を全く荒廃させ続いて大革命の市街戦と武力干渉の数年をへて飢餓と混乱の中心に立ちながらタンボフの県執行委員会に打電してミチューリンの育種場を調査させた人があつた。それはラジミール・レーニンであつた。タンボフの調査報告がモスクワに届いて間もなくカーニン（最高ソビエト幹部会議長となる。 $1935 \sim 1946$ ）が派遣され、やがて育種場の管理は農務人民委員会に移され、直ちに電気と水

道が引かれ測候所や化学研究所、細胞学研究所等が設けられた。その内に大室や陳列所が建てられ付近の大農場が併合される。地代や肥料代に困っていた革命前のことを考えると夢のようであった。ミチューリンの育成した苗木は1年に1.5万の木も全ソビエトに配給されるようになった。

1932年ミチューリンの住居するコスロフの町名を彼の業績を永久に記念するためミチューリンスク市と改称した。そしてこの年9月全市をあげての記念祭が挙行され、全連邦から集まった植物学者の講演会が開かれた。そしてミチューリンは中央執行委員会からソビエト最高のレーニン賞と労働赤旗章を授けられ、全ソビエト連邦の労働者、農民から慈父のように慕われ、条件反射のバプロフや芸術座のスタニフラスキーと共に国宝的存在とされるようになった。

以上長岡氏の記事を要略すると、ミチューリンの事をくわしく知りたいた人は浜田秀男、川村英五郎共著「ソ連農業の父ミチューリン」昭和24年柏葉書院発行を見られるがよいと渥美氏の手紙であつた事をお知らせする。

長岡氏の記事が発表されたのは前でも書いた通り1935年であり、これによつてミチューリンが一般に知られるようになったりであるが、これより数年前すでにミチューリン研究所の所員とエスペラントによつて直接通信し、ミチューリン宛の手紙もエスペラントで書き発送しようとした時にミチューリンが他界した事を知りこれは果せなかつたが、彼の寒地農法を北海道に導入しようとしたエスペランティストがいた。

その人は前号でちよつと紹介したが、札幌で開催された第24回日米エスペラント大会に緑星堂入りリンゴを提供した(58号/P)渥美雄氏である。渥美氏の母上は天皇陛下の養育係をされと渥美千代さんで市立高女の先生をしておられたから札幌では有名人であつた。渥美氏は札幌エス会の有力メンバーであり、当時札幌エスペラント研究会と言つた札幌エス会に入会されたのは大正9年(1920)と古い記録であり、又1921年には学会に入会された事がR0に出ている。渥美氏は天皇陛下と同年の出生であるから、札幌エス会に入会されたのは当時の北海道帝国大学の農学部にて在学中か卒業した頃と思われる。大学卒業後琴似にある北海道農事試験場に勤務しておられた。1933年9月第2回全道エスペラント大会が札幌で開催された時大会大学でブドウのせん定について講義されたと。その後1935年岐阜農学校に転職され3月27日札幌を出発されたと(小史/P)。

最近いたいた手紙で近況を知らせて下さつたが昭和49年岐阜大学定年退

官。昭和47年ある女子短大で就職、昭和48年再び定年退職今日に至るとの事であつた。

渥美氏がミチューリンの事を知つたのは長岡氏の記事が現われるより数年前である。そして「ロシアの新種育成家ミチューリン」という論文を最も權威ある専門誌「農業及園芸」第10巻第10号(昭和10年、1935)に発表されたのである。これがミチューリンの名前が専門誌に現われた初めであるばかりでなく長岡氏の記事と異なり単てミチューリンの業績を紹介するにとどまらずついにミチューリンその人でエスペラントの手紙を送ろうとした事まで記されており、まことに我々エスペランティストにとつて貴重な記録である。

以下同氏の論文を要約する。

- (1) 余はかねてから国際補助語エスペラントの実用性を重要視、之によつて世界各国の同学エスペランティストと交通を行ひ、以て知識の交換、相互の理解等を図る一助となすべく企図する所があつた。——という書出してミチューリン研究所員でありエスペランティストである A. D. Borisoglebski 氏並びに I. Murómceev 氏とエスペラントで通信してミチューリンの事を知つた。数回にわたり照会を重ね文献の送付を受けなどしてミチューリンの偉大さに驚ろいた。

然るに本邦ではミチューリンの名が知られていない。只7月6日東京朝日新聞紙上に長岡氏の記事が出ていただけである。それで余は交通並にエスペラント文献によつて知り得た事を発表し同学の士に紹介する。殊に樺太、北海道、東北地方を始め、朝鮮、満州等寒冷地方園芸関係者の注意を喚起したい。

と述べ、次にロシアと交通する事の困難さ、友人、知人の誤解、偏見等について記しておられるがこの部分はその当時の記事のまま掲載したからご覧願いたい。渥美氏はこの部分をやわらかな文章で表現しておられるが、事実この当時エスペランティストその者がリスもその著書「危険な言語」で述べているように(同書105頁)西瓜(外はみどりだが割れば中は真赤だ)だと見られていた時代であるから、ことにソビエトと交通する等という事は非常に危険であつたのである。

(2)

余がロシアのエスペランティストと斯く自由に交通を行つて居るのを見られて、斯くしては交通の内容を知らぬ外部の人々から思想的に根も無き誤解を受けるやうなことがある。餘名を茲に列ねる事は差し控えるが、御好意誠に有り難き次第で、本文発表の機会に深く感謝の意を表する次第である

この序に再一言して置くが事實エスペラントと云ふと、直ぐに左翼運動と何等かの關係を生じ勝のやうに誤解し、之を危険物視する人が今猶一部に在る事は吾人の甚だ遺憾とする處である。勿論エスペラント其の物は斯様な物では斷じて無い。私にしても最初練習の目的で廣く交通者を求めた頃から、冒頭に記したやうに、ここ數年來範圍を特に専門知識の交換と云ふことに限定して交通して居る今日に至るまでに、ロシア人だけがさへ數名の者と、長きは數年に亙つて交通を行つたが、事實未だ嘗てかかる傾向を帯びた書面を受けたことは1回も無い。全く安心して、他の多くの國々の人達に對すると同様、知識交換、研究上の相互援助と云つた方面に於て他意無き交通を續け、多くの便宜を得て居る次第である。

要するにエスペラントはタイプライターや謄寫版と同じく、以つて思想を託すべきもの故、用の善悪は依つて其の使用者に在る。之が善用に努め普及を圖ることこそ、吾人の責務であると考へて居る。

尙ほ、此の機會に、余の照會に應じ再三 MiçURIN 氏に關して詳細なる回答を寄せられた前記 A. D. BORISOGLEBSKI 並 I. MUROMCEV 兩氏に對し厚く謝意を表する次第である。

〔追記〕 農業世界 9 月號に長岡義夫氏の MiçURIN 氏に關する記事が載つて居る。余は近來前記の交通者から音信が無いので MiçURIN 氏の近況に就いては全く知らずに居たが、今長岡氏の記事に依り MiçURIN 氏が既に他界したことを知つて愕然とした。

實は余は MiçURIN 氏の耐寒性果樹を直接輸入せんと考へ、其の第一歩として、旁々 BORISOGLEBSKI 氏からの依頼もあつた事故、本邦寒冷地に在る野生可食果實の種子、殊に近年 MiçURIN 氏が興味を有つて居たと云ふ *Actinidia* 屬の枝梢を氏に送らうと企てて居たのである。*Rubus* の種子の如き既に北海道産のものを取寄せて今現に余の机上に在る。MiçURIN 氏自身エスペラントを解するか否か不明だが取敢えず氏に宛てる可き書簡も今やタイプライターに載せられんとして居る。此の時其の宛名人は既に亡き數に入つたことを知つたのである。思はず遂かに MiçURIN 氏の靈に黙禱した。

MiçURIN 氏の肉體は消えても事業は永存する。余が氏の育成種を輸入せんとする企は氏の死に依つて廢せらるべきでないこと勿論である。尙ほ余はロシア語を能く解せぬので MiçURIN 氏の業績を讀破し得ないのを甚だ遺憾に思つて居る。ロシア語に堪能なる方々の手に依つて氏の業績が詳細本邦に紹介せられんことを願ふや切である。

(9 月 2 日追寄)



(3) ミチューリンの略歴であるが前述の長岡氏の記事と重複するので省略するが

アメリカのパーバンクとの比較を述べておられる。兩人とも家庭は裕福でなく、共に生活のため早くから働らかなければならなかつたこと。パーバンクは米国で会社の職工をやつて辛くも収入を得ていたころ、一方ロシアではミチューリンが鉄道従業員となつて家計を立てていたこと。二人とも高等専門教育を受けておらず、貧困と戦い重なる失敗に打ち勝つて自身で実験を行つては知識を積んで行き、ついに成功した事など述べておられる。

その他専門的な記述は省略する。

(4) パーバンクの名は以前からよく知られていたのに反し、ミチューリンの業績は国情の相違や言葉の障壁に妨げられて本邦には一向紹介されていない。わが国は版図長く、遠く熱帯から温帯の北部にまで及んでおり従つて作物の種類も熱帯作物から寒地の作物にわたつてゐる。カリフォルニアの適種とモスクワの適種のいずれかが札幌に適する可能性があるかは言ふをまたない。現にパーバンクの育成するものを試植観察しているが、幼齡期に於ては耐寒性が不十分である。この意味から本邦北部地方に於ては大いにミチューリンの業績に注目する必要がある。ロシアから直接ミチューリンの育成種を輸入する事は難かしいが、ミチューリンの育成種がカナダや米国に渡つてゐるから間接に手に入る事は困難でないと思われる。本邦北部並に鮮満地方の人は今後大いにミチューリンの育成種に注目されたい。

以上のように結んでおられるが、ミチューリン育成種の輸入計画していた事、その事が運ばない内に、渥美氏自身農事試験所を離れて岐阜でうつられる様になつた事は残念であるとも書いておられる。

そして渥美氏は直接エスベラントでミチューリンに手紙を出そうとした。ミチューリン自身エスベラントが解らなくても、エスベラントを知つてゐる人が数人も彼の配下にいるからである。所が手紙をタイプしようとしている時ミチューリンが他界した事を知つたのである。この事は農業と園芸の追記にくわしく記されているのでこの分もそのまま文末に掲載する。(29年-ジ)

もしこの時ミチューリンが生きていたなら、渥美氏の転勤がなかつたら、そしてミチューリンがエス文の返事をよこしたなら、北海道の農業にミチューリン農法が導入されたであろう。そして戦後のあの食糧不足、ことに野菜のない時代にこの農法が大いに貢献したかも知れない。

渥美氏が札幌を去り岐阜にうつられる時、ソビエト並にアメリカからエス文による公文書が農事試験場に送付された場合、その解説者として私を試験所に推薦して行かれたが、残念な事にその後エス文公文書は来なかつたらしく私には何の連絡もなかつた。

(追記) 渥美氏についても一言。同氏が1935年札幌を離れられる事になった時札幌エス会に記念として札幌エスペラント会の旗を一流寄贈された。その旗が最近センターが移転した頃から何処に行つたのか解らなくなつていた。ところがそれは札幌エス会の事務所吉原先生の所に大切に保管されていた事が解つた。写真の旗がそれである。私等が四十数年それをふりつづけて来たので大部いたんでいるが実になつかしい大切な旗である。

なお、ミチューリンが最近のソビエトではどう評価されているのか、星田君が知人に問い合わせている。それはわかり次第お知らせしたい。





渥美さんの訃報に接して

相 沢 治 雄(札幌)

渥美氏とミチューリンの記事も脱稿したし、長らく行方の解らなかつた札幌エス会の旗(渥美さんが寄贈されたもの)も発見し、その写真も出来上つたので、しばらくぶりで渥美さんに手紙を書こう、旗の写真も送ろう、8月には名古屋の日本大会に出席するので、その時は渥美さんの住んでおられる各務原市は、名古屋の近くなので四十年ぶりでお目に掛り昔の話などしようと思ひながら何気なく新聞を見て驚いた。

渥美さんの訃報が出ているではないか、

渥美樟雄氏(あつみ・くすお 岐阜大学名与教授・果樹園芸学専攻)研  
26日午前11時59分胃ガンのため岐阜市長森一色の県立岐阜病院で  
死去、75才

との記事が焼けつくように眼底で映じた。

もうしばらく元気でおられたら——— 8月にはきつとお会い出来たのに何とも残念でならない。ミチューリンの記事も前号でも出しをら読んでいたをだく事も出来たので———。丁度渥美さんがミチューリンで手紙を送ろうとした時彼の訃報に接したように何としても残念でならない。

つつしんで渥美氏の御霊前にこのLEONTODOの一冊をささげ同氏の御冥福を祈るのみである。



(el Petero al s-to Aizawa H.)

私が寄贈したエス会の旗が先程まであつたとは驚きです。よく大切にしてくださいましたことです。

LEONTODOは立派なOrganoですね。58号を拝見したわけですが創刊はいつですか。ご発展をいのります。

渥 美 樟 雄

(昭和初期の札幌エス会員)別項記事Miçurinと渥美樟雄氏参照

故竹吉正広氏御令嬢 竹吉美佳子さんからの手紙

木村様が書いて下さった父への哀悼文まんとうにうれしく拝見させていただきました。

早速父に報告いたしました。きつと喜んでいることと思います。

私共は、父のエスペラントの事はあまりよく知りません。父も若い頃は相当活動してきとは聞いていました。その後は目を悪くしたりで残念がつていました。本の事ですが、父は大事にする人だったので多小はあると思います。探しましたら送らせていただきます。

父とつても使つていただけをら本当に喜ぶでしょう。

まんとうにいろいろありがとうございました。

これからも益々エスペラントの発展する事を願いお礼を申し上げます

(故竹吉正広さんより所蔵のエスペラント書5冊を寄贈していただきました。

北海道エスペラントセンター内のHBLの文庫で保存してあります。)

## El mia leterkesto

LEONTODO N-ro 58 とその抜刷をありがたく拝受けいたしました。

エスペラント大会記念スタンプ第1号出現のいきさつもたいへんおおらかでそのように簡単に行けば、何事も万々才でしょうけれど。しかし、あまり正直過ぎるのも考えもので、何人集まるか確実でない催しでも、利用見込み数だけで申請するのですから、実現させようと思えば、何とでもなると思います。

(前川治哉)

(Fama filaaeristo 前号記念スタンプ記事並びにエスペラントの世界7号参照)

大量入荷しました。例会のテキストに、中・高校・大学クラブのテキストに

ESPERANTO (1) 1000円 ハンガリー語出版された 10-14才向けの国際

ESPERANTO (2) 1000円 テキスト。各巻200-250ページ。2巻は「イラトカ」

UNUAを終じた人なら、何とかがいていけず(内容は文法生にも十分価値あり?)

(1)は入門初級の学校テキストの決定版。詳しい解説はR.O.E.

注文は 北海道エスペラント連盟 田舎部/062 札幌市豊平区平岸1-8  
北海道エスペラントセンター内

Takamacu, '76-03-15

Estimata siĵoro,

Mi danke ricevis viajn leteron, fotojn kaj Leontodon n-ro 58. Kun granda intereso mi legis la organon de HEL. La enhavo estas tre bunta. Oni rimarkas la nomojn de s-ro Mituisi, fama recenzisto, kaj de s-ino Nagata, kiu aktivas en eŭropo. La artikolo de s-ro Sakurai ankaŭ tiris al si mian atenton. "Aino estas la homo" de s-ro Mukai emociis min multe. Mi respektas la verkinton. Lastatempe mi ekŝatas 'ŝiŝamŝn, kiu estas en la aina lingvo, ido de Dio. Nun mi havas intereson pri la ajna problemo.

"La vojaĝo al antikva Oriento" de s-ro Ootomo estas tre longa, sed ne enuiga. Li povas plene esprimi ĉion, kion li volas skribi, kvankam la plumo estas naiva.

Tre valora estas via artikolo pri la kongreso 1936, en kiu troviĝas nomoj de s-roj Ito-Saburo kaj Okamoto-Koĝi. Ambaŭ ludis gravan rolon en la historio de Japana Movado. Tiu kongreso estas tre kara al mia memoro, ĉar tiam ankaŭ mi partoprenis ĝin kiel juna komencanto.

Dankante vin pro via amikeco  
kaj gratulante vin pro brila Leontodo,  
sincere via,

Osaki-Kazuo\*

(el letero al s-ro Aizawa H.)

\* 大嶋和夫, tradukinto de "Kaijinmaru" (verkita de Nogami Jaeko)

~~~~~

Kumamoto, 4. 3. '76

Estimata sinjoro,

-----  
Mi legis kun dankego la leteron kaj Leontodon. La lasta estas ĉiufoje laŭdinda, tamen precipe "Aino estas la homo" kaj la aliaj.

Vi kaj ĉiu hokkajdano ja bone, vigle studadas kaj laboradas! Tio forte kortuŝas min. Ĉe ni estas malĝoje, ke nia movado pli kaj pli malplivigliĝis, plue aktivaj gejunuloj baldaŭ translokiĝos al Hukuoka, tre bedaŭrinde.

-----  
via  
NORITA Reiko

(el letero al s-ro Aizawa H.)

~~~~~

# 国際緊張の谷間を エスペラント語で懸け橋

吉小牧の星田さん



吉小牧市糸井二九三ノ八三、会  
社員星田淳さん(右)は吉小牧エス

【吉小牧】昨年四月のサイゴン陥落で、ベトナムとアメリカに離れはなれになったベトナム人父子の文通を吉小牧のエスペラント語が橋渡ししている。両国間に国交がなく、直接文通が出来ないため、この仲介は父子が自由に手紙がやりとり出来るようになるまで続けられるという。

ベトナム会の代表で、方田共通語、といわれるエスペラント語を始めて二十数年。世界各地の十数人とエスペラント語の文通をしてゐる熱心な活動家だ。

星田さんがふとした機会から南ベトナムの医師Kさん(カウエン)と交流をもち、内戦を起すまで知らせてきた。だが、五十年春「近く結婚する」といつてきた星田さん(右)も喜んで引き寄せた。星田さんの手もとに、月に一回Kさんから手紙が届く。中は一通は星田さんへ、もう一通は父(ナム)へ。星田さんが「ベトナムの医師Kさん(カウエン)と交流をもち、内戦を起すまで知らせてきた。だが、五十年春「近く結婚する」といつてきた星田さん(右)も喜んで引き寄せた。星田さんの手もとに、月に一回Kさんから手紙が届く。中は一通は星田さんへ、もう一通は父(ナム)へ。星田さんが「

父(ナム)——息子(滯米)文通を中継

## 「国交回復まで……」

結んだ。結婚したあと、四月に「近隣民」としてアメリカに渡り、ペンシルベニア州で産科の道を目指して再び勉強しているという。

そこで、Kさんが星田さんに頼んだのは、ベトナム市(自国サイゴン)で教師をしている父、Lさんへの手紙の橋渡し。アメリカから星田さんへ手紙を出すための「日本経路」でなくとも父Kさん、Lさんからの便りを手に「一日も早く再会を」と願う星田さん

Lさん(右)は星田さんへエスペラント語で息子あての手紙が来る。こうして父子は、Kさんに長男が生まれたこと、アメリカに在住するわけではないこと、互いに有効であることなどを近況を知らせ合っている。

父子の住む両国に国交が回復されな限り、星田さんは仲介を続けるが「受け止めるなら、いつまでも」と意欲十分。「だがLさん、Kさんの再会が一日でも早く実現すれば、こんなうれしいことはない」と語りつづけている。

ENHAVO

paĝo

Programo de la 40a Hokkajda Kongreso.....1  
Kasraporto de HEL.....2  
北海道連盟団体部概況.....6  
北見工協会誌性.....7  
旭川東高校工協会外同好会のその後..... 沢野 洋司.....8  
活動報告.....9  
Kiu sian langon katenas, Dio lin nenas. ....Nara T. ....13  
Ĉu vi iam renkontis urson? .....Blua Dorsosako....14  
Ĝi rememoro en somero.....Iĉikaŭa T. ....16  
Vojaĝo dum unu semajno.....Sato T. ....17  
La Tutlanda Kunloĝado en Yaizu, '76 .....Ŝibata Ŝ. ....20  
Vojaĝi tra la bela lando, Hokkaido .....Iwanaga K. ....21  
Mi opinias.. .....Iwamoto K. ....24  
ARKIVO DE HEL (3)--Miĉarin と 澤美 穂 氏.....相沢 治 雄.....25  
EL NIA LETERKESTO.....34  
Post la redaktado.....16

LEONTODO n-ro 59

1976 年 7 月 24 日発行

発行所 北海道エスベラント連盟

060 札幌市中央区南2.西4.中央タイピスト学院内  
TEL 251-4750  
振替口座 (小樽) 17075

編集 Sawaya Y.  
tajpis Kitabatake H.  
helpis Sato T. kaj Ŝibata Ŝ.

Redaktejo: ĉe HOKKAJDA ESPERANTO-CENTRO (tel.011-831-7248)  
062 Sapporo, Toyohira ku, Hiragisi 1-8